

- 作型を複数有し、施設年2作体系や露地栽培により、キクの出荷時期が長いため、古い産地ではあるが、市場からの**産地評価は高い**。
- 高齢化により、生産者の自然減が加速している中で、近年、新規栽培者や後継者が参入も活発であるため、現在の販売量は横ばいで、産地維持の傾向ではあるが、**生産者は若返りが始まっている**。
- JAが販売金額目標を1億円とする園芸メガ団地事業に参加し、産地を牽引、起爆剤の効果となり、販売金額は2億円を突破した。

具体的な成果

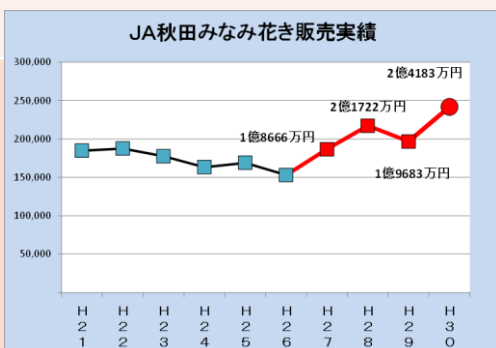
○栽培マニュアルを策定し、産地技術の平準化を図った。それにより、出荷品質は底上げされ、出荷先からの品質評価が高まった。



○高温回避の作付け計画を策定し、開花期の遅延を抑制。それにより、安定出荷による価格の安定に繋がった。

○盆需要期の出荷に向けた電照管理を生育調査と照合することで、より高精度の出荷調製ができた。

○穂いもち病の発生予察システムを流用し、葉の湿潤状態から、感染を予測し、早期防除に務めたことで、被害は前年より軽減できた。

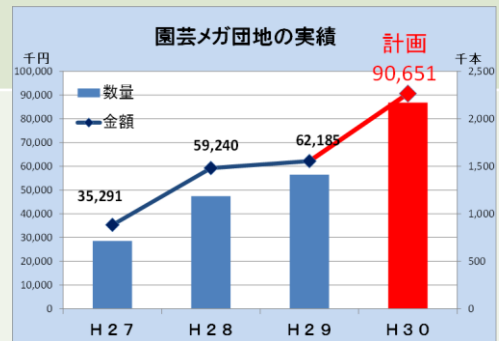


普及指導員の活動

○メガ団地の生産を「管内の若手生産者」に限定したアパート方式を提案、研修機能も持つ生産組織としてスタートさせた。

○農業試験場との連携により、新規技術の実証、新型機械の試験を行うことで、生産意欲の高揚と技術の研磨に繋がった。

○技術等の情報発信、現地試験、講習会等をメガ団地で実施することで、その生産者らを地域の若いリーダー役として育成できた。



普及指導員だからできたこと

- 試験場等と産地との仲人役として意見調整をすることで、双方理解を深めつつ、**産地へ新技術が早期浸透**ができた。
- メガ団地事業を活用し、**新たな生産リーダーの育成**できたことで、産地誘導できたことで、生産意識は高揚している。

## 園芸メガ団地を起爆剤としたキクの産地拡大

活動期間：平成26～29年度

### 1. 取組の背景

指導対象産地では、キクの栽培において、作型を複数有し、施設年2作体系や露地栽培により、出荷時期が長く保てることがセールスとなり、市場からの産地評価は高い。

また、高齢化により、生産者の自然減が加速している中で、近年、後継者や、新規栽培者や参入も活発であるため、現在の販売量は横ばいで、産地維持の傾向であり、更に生産者の若返りが図られている。

その新規栽培者とJAが販売金額目標を1億円とする園芸メガ団地事業に参加し、産地を牽引、起爆剤の効果となり、販売金額は2億円を突破した。

### 2-①活動内容とその成果（メガ団地について）

＜運営について＞ 協同農業普及事業（26～29年）

園芸メガ団地事業によるハウス団地は、JA等関係機関と協議を重ね、将来を担う若手生産者を育成することを第一の目的とした。そのため、アパート 방식을提案し、研修機能を持つ生産組織として栽培をスタートした。

＜試験研究機関との連携＞

県農業試験場と連携し、定植機械の植え付け間隔の実証試験や白さび病の発生予想時期の検討をすることで、メガ団地内外の若手生産者の生産意欲の高揚と技術の研磨に繋げている。

＜JAとの連携＞ 協同農業普及事業（26～29年）

JAと連携し、現地講習会の会場としての活用や、農薬効果試験、技術情報の情報発信として、メガ団地を活用することで若手生産者らは、地域の若いリーダー的役割へと育成できた。

### 2-②活動内容とその成果（メガ団地を含む産地全体）

＜新たな栽培マニュアルの作成により産地評価獲得へ＞

メガ団地での技術実証を盛り込んだ栽培マニュアルを作成、活用開始。

- ・産地全体の技術の平準化が保たれ、出荷品質の底上げ実現。
- ・開花期の遅延抑制による安定出荷が実現
- ・病害の発生予測

※市場等出荷先からの産地評価は高まり、価格は安定。

#### 4. 農家等からの評価・コメント

(男鹿園芸メガ団地 新規栽培者 T氏)

J A、普及の定期的な巡回指導と講習会により、作業に遅れを生じることなく、安心して栽培に取り組めた。また、栽培に関する疑問点を普及に取り上げてもらい、県農業試験場と実証試験として行えたことは、非常に良い経験となった。今後とも引き続き綿密な指導をお願いしたい。

#### 5. 普及指導員のコメント

(秋田地域振興局 農業振興普及課 主幹 児玉浩一)

メガ団地の育成をスタートする以前から、普及主導で試験場、産地、J Aの意見調整を行い、双方の理解を深めていたことで、早期に支援体制は整い、生産者も安心して生産できたと思う。

その結果、産地は新技術の早期浸透と、良品質生産への意識が高まり、活気のある産地に変革しつつある。

#### 6. 現状・今後の展開等

アパート方式で若い生産者を育成している男鹿メガ団地は、その役割から、若い生産者を始め、産地の生産意識を前向きに変え、新たなスタートを切れたと評価する。

それにより、メガ団地への参入希望者が地元の他県内外からも増えており、産地としても追い風に働いている。その勢いを妨げないよう、男鹿メガ団地は、規模を拡大し、より多くの新規就農者や研修生を育成し、産地拡大の加速化に大きく貢献していく。